

でした。が、女のくせに男のようにくびのところでおつりと切ったかみの毛を右の手でなであげながら、いつものとおりのやさしい顔をこちらにむけて、ちよっとくびをかしげただけでなんのご用というふうをしなさいました。そうするとよくできる大きな子が前にでて、ぼくがジムのえのぐをとったことをくわしく先生にいつけました。先生は少しくもった顔つきをしてまじめにみんなの顔や、はんぶんなきかかっているぼくの顔を見くらべていなさいましたが、ぼくに、

「それはほんとうですか。」

ときかれました。ほんとうなんだけれども、ぼくがそんないやなやつだということをどうしてもぼくのすきな先生に知られるのがつらかったです。だからぼくは答えるかわりにほんとうになきだしてしまいました。

先生はしばらくぼくを見つめていましたが、やがて生徒たちにむかつてしずかに、

「もういつてもようございます。」

といって、みんなをかえてしまわれました。生徒たちは少しものたらなそうに、どやどやと下におりていつてしまいました。

先生は少しの間なんともいわずに、ぼくの方もむかずにじぶんの手のつめを見つめていましたが、やがてしずかに立ってきて、ぼくのかたのところをだきすくめるようにして、

「えのぐはもうかえしましたか。」

と小さな声でおっしゃいました。ぼくはかえしたことをしつかり先生に知ってもらいたいのでふかふかとうなずいて見せました。

「あなたは自分のしたことをいやなことだと思っっていますか。」

もう一度そう先生がしずかにおっしゃったときには、ぼくはもうたまりませんでした。ぶるぶるとふるえてしかたがないくちびるを、かみしてもかみしてもなき声がでて、目からはなみだがむやみに流れてくるのです。もう先生にだかれたまま死んでしまいたいような心持ちになってしまいました。

「あなたはもうなくんじゃない。よくわかったらそれでいいからなくのをやめましょう、ね。つきこの時間には教場に出ないでもよろしいから、わたくしのこのお部屋にいらっしゃい。しずかにしてここにいらっしゃい。わたくしが教場から帰るまでここにいらっしゃいよ。いい。」

と、おっしゃりながらぼくを長いすにすわらせて、そのときまた勉強のかねが鳴ったので、机の上の書物を取り上げて、ぼくの方を見ていられましたが、二階のまどまで高くはいあがったぶどうづるから、一ふさの西洋ぶどうをもぎって、しくしくとなきつづけていたぼくのひざの上にそれをおいて、しずかに部屋をでて行きなさいました。